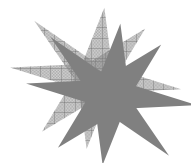


未来フォーラム

第6号



編集：未来フォーラム事務局
発行：立命館大学教職員組合
2010年10月5日発行



第2回「未来フォーラム」を開催！

——フォーラム「教学の高度化と学生の学びと成長とは」を開催しました——

さる10月1日、以学館3号教室・クリエーションコアCC101にて、「第2回未来フォーラム—教学の高度化と学生の学びと成長とは—」を開催しました。

当日は、**中村 正氏**（教学担当常務理事）、**佐藤 敬二氏**（学生部長）、**春日井 敏之氏**（教学部長）の3名に報告を頂きました。会場には80名を超える教職員、学生、院生が参加し、熱心な議論が交わされました。

フォーラムの主な内容をダイジェストでお伝えします！

最初に司会の**宇野木 洋氏**（文学部教授、「未来フォーラム」世話人）より、立命館の将来を考えるためには「教学の高度化と学生の学びと成長」を今まさにしっかりと議論することが必要だということでテーマを設定したこと、また突然の新キャンパス取得の問題について学内でさまざまな意見が展開されているが、まず、あるべきキャンパス像のコンセプトが不可欠であり、この点についてもぜひ議論したいという、本日のフォーラムの趣旨説明がありました。

これをうけて、最初に中村氏から、現在行われている「教育の質強化」の取り組みについての報告がなされました。

○中村 正 教学担当教務理事 発言要旨

これまでの立命館の改革は新学部を作るなど目に見えやすいものであった。それはそれで現在を作ってきた重要な取り組みであったが、今後は「改革の仕方を改革したい」と私は主張している。その際に重要な視点は、2020年くらいまでの18歳人口の動向や高等専門職の再教育などの社会的ニーズの見極めと、もうひとつは今年度認証評価の取り組みの中で立命館らしい教学とは何なのか、そういう議論をしていきたいということである。

その際に大事なものは、今までなかった基礎条件を保証する質的強化ということである。これまでも教員組織整備計画を立てて教員を増やしてきた経過はあるが、残念ながら質を含んだ教育組織計画は十分たてられてこなかった。すべての学部・研究科が足腰を鍛えるためにどうすればいいかということで、今回ST比の改善を提起している。小集団科目の見直しや学部教学の学びのパスを考えていく中で、おのずとST比の指標が見えてくるので、それはぜひ実行したいと考えている。その実現のためには過密なカリキュラムがあるので、それを何とかするために各学部のカリキュラム精選をお願いしている、これが「教学改革ガイドライン」である。

具体的な課題としては、ひとつはラーニングコミュニティの持っている力、多層的多重的なコミュニティが大事であるということである。中でも、立命には課外活動で学んだという経験を持っている学生が多いし、また京都という地域に広がるコミュニティで学んでいる経験も多い。これらの持っている力は重要である。もうひとつは教員の全人格的発達を考えていける体制作りである。私学である本学は研究分野に特化する事はできないが、しかし教員が教育・研究・

社会貢献・行政の全ての要素をバランスよくこなせる体制をつくっていかなければならないということである。3つめは昨今の教育・研究のあり方を見ていると、職員との共同なしには成り立たなくなっている。教育場面ではプログラムをコーディネーションしたり、地域との橋渡しをすることが必要となるが、教員だけでは担えずGPで雇っているスタッフなどがその分野を担っている。それらのスタッフは現状では有期雇用であることから、専門化スタッフの問題も新しいテーマとして論点としたい。

そんな問題関心から、条件整備をぜひ実現し包括的支援が出来るかどうか、が今後の課題だと思っている。

新キャンパス問題については様々な意見があると思うが、ここで細かなやり取りは出来ない。しかし、今回の新キャンパス提起の趣旨は衣笠狭隘化の解決であり、その意味が重要で、教学高度化の足かせになってはならないと考える。

次に報告した佐藤氏からは、主に正課外活動の支援のあり方についての問題提起がなされました。

○佐藤敬二 学生部長 発言要旨

「教育の質強化」というテーマは共通のキーワードとなって広がってきているが、「ガイドライン」の話は狭い問題であり、各学部での議論を聞くとそこにしか目が行っていないのではと心配している。ST比の議論も大事だが、どんなにがんばっても国公立には適わない。その中で本学が重視すべきなのは、学生の自主的な取り組みを大学がどう支援するか、ということである。

「教学の質強化」といった場合に、いかに専門教育を教え込むかという狭い意味での教学改革ではなく、学生が伸びていくためには学生が自主的に学んでいく、それが出来るシステムが必要ではないかと考えている。正課外とは広い意味であり、サークルだけでなく、自主的な学びの取り組みも含めている。これらを支援するためには、施設の問題も出てくる。どんなキャンパスになるにせよ、施設条件は必要となる。正課外での学びを重視するにしても、それが学べる場所や時間が保証されなければ絵に描いた餅になる。

こういった事を考える中で立命館らしさはどこにあるか、という議論につながってくると考えている。

次に春日井氏からは、「教学改革ガイドライン」提起の背景について問題提起されました。

○春日井敏之 教学部長 発言要旨

現在の教学は学生のためになっているのかを学生から聞かないといけない。そのための「教学改革ガイドライン」であるしそのための手立てでもある。学生の感情をきちんと聞き取り、自分の体験を語る。やったことの数ではなく、やっていることの意味をしっかりと問い、意味づけを周囲と共有していく、そう言うことが出来る小集団教育が必要ではないかと考えている。

市民として生きるための社会性・ライフスキルの形成、洞察力・感性共感性の形成をどうして行くのかは大変重要な課題である。「ガイドライン」において、なぜ立命が今「学習者中心」と唱えているか。学生は増え、多様となっており、また単位僅少者も増えてきている。初年次教育においてこれらの学生をどううまく受け入れて、立命にきてよかったと思わせて、そこで根を張っていくようにするかはとても大事である。そのための教員の支援は非常に重要である。学生を中心としつつ、それを教育するという、そういう姿勢に対するこちらの謙虚な姿勢がいると思う。クラス人数の縮小、科目精選、講義規模の適正化などいくつか課題がある。また標準持ちコマの減少という大きな問題もある。さらに研究科の開講のありようも、大きな課題として提示させてもらっている。

今回のキャンパス問題が、このような全ての学部・研究科の教学改善の足かせになるようでは本末転倒になる。今回提案している「教学改革ガイドライン」は全ての学部・研究科の教学の質向上につながるものであり、そこを最優先させていきたいと思っている。常任理事会や前の総長懇談会でも、総長が「現在の学部改革論議とキャンパス問題は整合性がなければ決断できない」とおっしゃっていた。これは大変重い意味のある発言である。これは大事な視点として確認したい。

3名の報告・問題提起を受けてフロアから教員・職員・院生・学生など13名の方から活発な意見・質問が出されました。主な意見は次の通りです。

○フロア発言

【文学部教員】

立命館の教職員はみな、職種職位を超えて同じ方向を向いて教学を重視してきたので、立命館の高い教学の質が生み出されてきた。しかし今、その教学を根本にひっくり返す状況にある。それが新キャンパスの問題である。私たちの意見で一致しているのは、「ちょっと待ってほしい」、この一点である。教学がどうなるのか、そこから論議をしないと解決できないのではないか？ ぜひ中村先生にはがんばっていただきたい。

【産業社会学部長】

第3委員会の委員長として議論を聴いていて、佐藤先生の話はまったく一致するところであった。学生の育つ場所は教室だけでないと思っている。もう少し居場所や密な交流が出来る仕組みがいるのではないかと考えている。

そういう議論の中で、施設条件は重要だという話はしてきている。しかし茨木キャンパスという話になると、もっと困難な状況を抱えるのではないかと、学びと成長に関する思いの着地点は茨木には直結しないだろう、と教授会でも意見がまとまった。新キャンパス問題は衣笠キャンパスの狭隘化から議論が始まっているが、茨木に積極的に移転したいとい衣笠キャンパスの学部はひとつもない。それでも決めるという話が進みだしている中で、産社は拙速な移転を決めるのに反対する決議をあげた。京都市内での展開、その他も十分検討すべきだと主張している。

このような状況でありながら、性急に常任理事会で決定されようとしている。学部の決議は全員一致であるので、その代表である私は、もう少ししっかり学内で議論を積み重ねる必要があると主張していきたいと思っている。

【教育学部職員】

現在でも各教員が所属キャンパス以外の教学をかなり担っている。そういう状況で、等間隔3キャンパスはありえない。先生方の負担が大変なことになる。

それと理事の方をお願いであるが、さきほど常任の日程の話があったが、全学協代表者会議はそれ以後に予定されている。これでは学生の意見は聞かない、そういうことになってしまう。しっかりと学生と意見交換するようにすべきではないか？

【高等教育問題に取り組む『ネットワーク京都21』理事長】

京都にとって、地下鉄集客増とまとまった市有地である山ノ内の意味は大変重要なものである。そういう背景で浄水場の跡地利用は大きな課題である。行政側からの大学に対する期待も極めて高い。京都であることのメリットは、外から見てみると、中で見ているよりも、桁違いに高いと感じている。「京都にある」ことの高い付加価値は、商業界、産業界でも以前からかなり言われている。京都の持つ高い付加価値を形成してきたのは大学であり、とりわけ立命館大学は建学の精神とその実践で大きな役割を果たしてきたと思う。立命館が京都を去ろうとしているのは大変残念である。

ちなみに京都市役所職員の中では立命出身者が一番多く、大きな役割を果たしている。

【法学部1回生】

課外活動に関して、かなり重要性を認識していただいているが、あくまで正課が優先だという意見もあり、そういう意見が五者懇談会でもあがっていたので、先生方の足並みが乱れている、それで一番困るのは学生である。教学で先生の個性が出てくるのは当然であるが、そういう根幹の部分で足並みが乱れているのは、大変困る。

新キャンパス問題は、プロセスが非常に非民主的であるので、ぜひ全構成員自治という言葉を出してほしい。

【産業社会学部教員】

春日井部長の最後の発言は非常に重要であった。産社では福祉現場で実習する、まさに京都という地域で学生が学んでいる、そういう教学の場があるし、その受け皿もある。それは滋賀も同じである。その点をよく見ておかないといけない。物理的なスペースだけでは解決できない問題がある。同じことが課外活動でもいえる。京都学生連盟などの活動のなかでも、学生たちは成長してきている。そういう蓄積も大事にしてほしい。また学費もとても重みがある。本当に学費は今のままでいいのか、という思いを今でも持っている。その中であんなに大きな「買い物」をしていいのか、そういう危機も持ってほしいと思う。

【経済学部教員】

先日、特別委員会から出た報告を見ると、2020年には赤字になる。ST比改善の最小限の教員人件費の上昇は見積もっているが、教育研究費用は一切上げないと見積もっている。2020年にやることは人件費を削る、ということであり、中村先生は20年に「はしごをはずされる」かもしれない。そういうことをどう見るか、リアルに見るべきだ。

【理工学部長】

この2年間、改革の議論を続けてきた。学生実態を把握する中ではっきりしたのは、これまでの小集団教育のあり方に限界が露呈したということだ。誤解を恐れずに言うと、学生を個で見ないといけない。学習方法は個人個人に合った形で届けていけないといけない、と考えた。そのためには教員数を増やさないといけない、そういう議論であった。その試行策として、ある学科では学科全ての学生に対する個人面談を実施し、その中で単位僅少者全員の背景を浮き彫りに、指導・援助も実現してきている。立命はもっとソフトにお金をかけるべきだと、改めて考えている。

以上のようなフロアからの発言を受けて、報告者より発言がありました。

○報告者まとめ

【春日井氏】

教学改革を実のあるものにするためには、学生・院生をパートナーであると認識し、その詰めた論議を今後していく必要があると感じた。学生の多様性はあるが、立命出身者は「伸びしろ」が非常に大きい、と言えるシステムをどう作っていくのか、そのことを教職員と学生が確信を持って作っていくことの大事さを、発言を聞いて改めて思った。正課外を問わず学生たちが学んでいくこと、失敗や挫折や葛藤をどうくってきか、そういった視点で個を大切にしたい。小集団教育のありがたさ、そこを確認しあえたのではない。

【佐藤氏】

正課と課外の問題に関する意見があった。もっと具体的な姿を出してしっかりと議論をしていかなければいけないと思った。学生部と教学部の連携が、もっともっと必要である。

【中村氏】

新キャンパスの話題が多かったが、もう少し教学の問題も議論したかった。

ST比のシミュレーションはまだ充分されておらず、今後いくつか組み込まないといけない変数がある。今後どうするかは既存教学の高度化を前提に議論していきたいと考えている。評価のプロセスに学生を参加させる、そういう点も大事だと思った。各学部や研究科でST比の考え方・受け止め方がずいぶん違うので、そこを丁寧にみて、バリエーションを豊かに考えていきたい。理解してほしいのは、この間の取り組みは、ST比の改善を突破口に教学の高度化を実現したいということだ。全員が納得できるまで至ってはいないかもしれないが、積極的な議論をしてほしい。

今日のフォーラムではずいぶん学ぶところがあつた。先ほど新キャンパスをめぐる今後の常任理事会の日程のことが紹介されたが、教学の責任者として、責任を持った発言をしていきたいと考えている。

最後に、組合の南野書記長より、まとめの発言がされました。

○書記長まとめ

今回のような教学を中心に据えた議論が非常に大事である。そこに改めて確信を持つことが出来た。新キャンパスの提起は、それが出来ていないのではないのか。前回の交渉でも総長からは、残念ながら教学の視点を軽視する発言があつた。これは学生からも指摘があつたが、議論の立て方に問題がある。新キャンパスの取得については、拙速な決定はありえないと考えている。理事会の一部の強硬姿勢には問題がある、ということを経験できたのではないのか。学生・院生を中心にすることが重要だ、ということを経験して、組合は奮闘していきたい。



未来フォーラムに関するご意見・お問い合わせは、組合書記局までお願いします。